

# 2019年度「学内留学—毎日英会話Ⅰ・Ⅱ」実施報告

## Report on the 2019 “Study Abroad on Campus—Everyday English Conversation I/II”

向後 朋美<sup>1)</sup>  
KOUGO Tomomi

### 要 旨

十文字学園女子大学では、2019年度に総合科目の枠内で「学内留学—毎日英会話Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）」を実施した。本稿では、この科目の概要を説明した後、実施状況と結果を報告する。さらに、2019年度まで実施していたCASECに関する資料と報告を用いながら、本科目が高得点層の習熟度の「聞くこと」の力の維持のために役立っていることを示す。さらに、本科目について考察し、本学学生の英語コミュニケーション能力の向上を目指すためには、2020年度から実施される「コミュニケーション演習」とそれ以外の英語科目で役割分担をする必要があることを指摘する。

### 1. はじめに

十文字学園女子大学では、2019年度に総合科目の枠内で「学内留学—毎日英会話Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）」を実施した。この科目は第一に学生の基礎的な英語コミュニケーション能力の向上を目指したものであるが、同時に、2020年度全学共通科目として新設された「コミュニケーション演習」を実施する前に、その運営方法・授業内容・効果・改善点などを検証する目的も持っていた。本稿の目的はこの科目の実施報告である。まず第1節でこの科目の概要を説明し、2節で実施状況と結果を報告する。最後に3節で2019年度まで実施していたCASECに関するこれまでの報告を用いながら、本科目について若干の考察を加える。

### 2. 科目の概要

2節では本学シラバスと本授業を業務委託した株式会社ウエストゲイト（以下、WG）が作成した報告資料をもとに、本科目の授業形態、ねらい、授業内容、評価方法、登録方法について概観する。

---

<sup>1)</sup> 十文字学園女子大学教育人文学部 児童教育学科

Department of Elementary Education, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University  
キーワード：英語コミュニケーション能力、学内留学、毎日英会話、CASEC

表1:「学内留学-毎日英会話Ⅰ・Ⅱ」の時間割枠

本学時間割枠(各 90 分)		「学内留学-毎日英会話Ⅰ・Ⅱ」各 45 分)		
1 限	9:00～10:30	なし		
		1-2(1 限後半)	1	9:45～10:30
2 限	10:40～12:10	2-1(2 限前半)	2	10:40～11:25
		2-2(2 限後半)	3	11:25～12:10
昼休み	12:10～13:00	L(昼休み)	4	12:15～13:00
3 限	13:00～14:30	3-1(3 限前半)	5	13:00～13:45
		3-2(3 限後半)	6	13:45～14:30
4 限	14:40～16:10	4-1(4 限前半)	7	14:40～15:25
		4-2(4 限後半)	8	15:25～16:10
5 限	16:20～17:50	5-1(5 限前半)	9	16:20～17:05
		5-2(5 限後半)	10	17:05～17:50
6 限	18:00～19:30	6-1(6 限前半)	11	18:00～18:45

### 2.1. 授業形態

「学内留学—毎日英会話Ⅰ・Ⅱ」はそれぞれ2単位で、その最大の特徴は、45分授業を月曜日から金曜日までの週5回、合計50回行うことである。前期は2019年5月9日～7月18日、後期は9月24日～12月5日に授業を行い、学生には通年通して受講することを推奨した。語学教育セクター（2019年度当時）が運営主体となり、本学園がWGに業務委託し、同社から派遣された英語を母語とする講師1名が授業を担当した。

授業は表1に示した通り、昼休みの12:15～13:00を含む9:45から18:45までを、1コマ45分、11コマに分け、講師はこのうちの6つの時間帯で授業を担当した。講師は1名であるため英語コミュニケーション能力によるクラス分けは行わず、授業は初級レベルとした。また、授業に加えて1日につき1コマ(45分) English Challenge（以下、EC）と称する時間帯を設け、講師と自由に話せる時間とした。

### 2.2. ねらい

この科目には3つの目標が設定された。第一の目標は、英語に対する苦手意識を克服し、外国人と接することに慣れることである。英語のみで行われる授業を通して英語に親しみ、継続的な学習習慣を身につけることを目指した。第二の目標は、高校までに学んだ英語の知識を活かし、自ら英語を発し、会話を続ける能力を身につけることである。身近なトピックに関する基礎的な語彙と表現を、毎回の授業内でのドリルを通して身につけ、反射的に英語を発することができるようになることを目指した。第三の目標は、英語を通して異文化に触れ、自らの文化を英語で表現するための訓練を行うことである。

### 2.3. 授業内容

両学期とも Warren Wilson & Roger Barnard (2006), *Fifty-Fifty Third Edition Book 1* (Pearson Japan) をテキストとして使用し、授業はすべて英語で行われた。

授業は毎日扱う内容がレッスンカレンダーの形で定められており、その予定に従って行われた。授業で扱う内容は、表2に示したように、主に日常の様々な場面やコミュニケーションの機能に焦点を当てて組み立てられており、適宜文法に関する事項・音声に関する事項が加えられている。また、「話すこと（やり取り）」の他に、学期末にはプレゼンテーション（＝「話すこと（発表）」）の原稿を作成する課題もあり、わずかではあるが「書くこと」の要素も含まれている。

表 2: 授業で扱う内容

トピック・場面別	前期	自己紹介、興味のあること、自分のできること、人物描写、日常生活、交通手段、手順の説明、日本文化紹介、プレゼンテーション
	後期	手順の説明、服装、社交の表現、感情表現、人物描写、職業、家族、休暇、好き嫌い、将来の計画、予想、時間と距離、ハロウィン、説明、過去の経験、外食、日本文化、海外の冬季休暇、電話での会話、プレゼンテーション
文法項目	前期	質問文、助動詞(can)、依頼文、時間の表現、日付の表現、数字、wh 疑問文(where)、頻度、定義文、現在進行形、過去形、未来形、招待の表現
	後期	比較級と最上級、仮定法、過去形、
音声項目	前期	音節、RとLの発音、
	後期	VとBの発音
その他	前期	会話の始まりと終わり、会話を広げる、会話中のテクニック、語彙ノートの作成、勉強法アドバイス
	後期	挨拶状の書き方、グラフ作成

(WG2019 年度レッスンカレンダーより筆者が再構成)

表 3: 到達目標

前期	①簡単な単語を使った短い文や質問をゆっくり話してもらった場合、理解することができる。②いくつかの丸暗記したフレーズ(句)や文を使うことができる。③センテンス(文)を作る努力をするが、通常、一単語や短いフレーズ(句)を使って、単純な質問をしたり、応答をすることができる。④日常よく用いられる動作を表す単語、時間を表す単語、単純な説明などを理解することができる。
後期	①短い文ではあるが、完全な文を作ることができる。②単純な質問や応答ができ、簡単な単語を使って文をつくる。②時々、応答の他の情報などを付け加えて話すことができる。③自分自身や自分の家族、趣味、好みなどについて、短く簡単な会話をすることができる。

表 2 に列挙した項目は、「中学校学習指導要領（平成29年 3 月告示）外国語編」で記載されている言語活動・言語の働き・言語材料と重複する部分が多い。しかし、これは中学校と同じレベルの授業を行っている、という意味ではない。学生は、中学校で一度は触れた言語活動・言語の働き・言語材料について「知って」はいるが、クラスサイズや週当たりの英語の時間数の関係から「使える」レベルにまでは到達できていない場合が多い。そのような学生たちに「話すこと（やり取り）」の機会を十分に確保し、少なくとも日常生活の場面で「使える」レベルに引き上げることを目指した授業内容といえる。

## 2.4. 評価方法

本科目は英会話能力（50%）と授業への参加態度（50%）を総合して評価された。以下は、それぞれの概略である。

英会話能力（50%）は、講師が学期末に評価を出す WCALD（Westgate Communicative ability Level Description）の結果を基に算出される。WCALD は低い方から順に PB (Pre Beginner) -1L (Low) -1M (Middle) -1H (High) -…… 6 H までの19段階に分けられている。本科目の到達目標を前期1H レベル、後期 2L レベルとし、到達目標レベルから 1 つレベルが下がるとに50点から 5 ポイント減点する方式で WCALD の得点を算出した。表 3 は前期到達目標の1L レベル、後期 2L レベルの具体的内容である。

授業への参加態度（50%）は（1）の 3 つの観点をそれぞれ 5 段階で評価し、算出される。

- (1) a. 講師の指示に注意を払い、それに迅速に従う。
- b. 積極的、かつ協力的にアクティビティーに参加する。
- c. 英語を使うことに積極的で、日本語に頼らない。

## 2.5. 登録方法

登録期間は前期4月8日～4月10日、後期9月11日～13日とした。両学期とも定員は上限70名で、毎日各自の空き時間で受講できる時間帯をWGのシステムを使い登録してもらう形式である。

前期は先着順とし、後期は通年受講を推奨していたため、(i)前期を履修していた学生、(ii)前期先着順で漏れてしまった学生、(iii)新たに履修を希望する学生、という優先順位をつけ登録させることとし、7月中旬に登録要領を学生に周知した。

## 3. 実施状況

3節では登録状況、出席状況、総合点、学期末学生アンケート結果について順に概観する。

### 3.1. 登録状況

登録者数は前期70名、後期65名であった。前期は上限を超える89名の希望があったが、先着順に70名が登録した。後期は2.5節で示した優先順位に従い70名に達したため締め切ったが、実際に登録した学生は65名であった。1年を通じてのべ135名（以下、登録者のべ人数）が登録し、このうち、両学期続けて登録した学生（以下、通年登録者）は47名であった。それぞれの履修登録者の学科別・学年別の内訳を表4に、学科別の割合と学年別の割合を図1に示す。

登録者のべ人数・通年登録者数ともに、児童教育学科が最も多く、次いで、生活情報学科、食物栄養学科が続く。人間福祉学科や文芸文化学科の履修者の割合は低い。児童教育学科が最も多いのは、中高英語教員免許の取得を目指す学生がいることや小学校で外国語が必修となったことが影響していると考えられる。一方で、人間福祉学科や文芸文化学科で少ないのは、所属学生が取得したい資格や将来の進路にとって英語が必ずしも必要というわけではないことが関係していると考えられる。

学年別割合をみると、登録者のべ人数と連続登録者のいずれにおいても1年生が半数を占め、高学年になるほど履修者は少なくなる。毎日授業のある1年生がその空き時間を利用して積極的に本科目を履修していたことがわかる。

1コマの受講人数はは両学期とも5名～15名で、時間帯別にみると昼休みの時間帯（4時間目）の受講者が多く、逆に1コマ目や11コマ目の時間帯の受講者は少なく、この傾向はとくに後期で顕著だった。

表4：履修登録者の学科別・学年別内訳

	2019年度前期登録者						2019年度後期登録者						2019年度登録者のべ人数						2019年度通年登録者					
	1年	2年	3年	4年	合計 (人)	割合	1年	2年	3年	4年	合計 (人)	割合	1年	2年	3年	4年	合計 (人)	割合	1年	2年	3年	4年	合計 (人)	割合
幼児教育	4	2	0	0	6	8.6%	2	1	1	1	5	7.7%	6	3	1	1	11	8.1%	2	1	0	0	3	5.8%
児童教育	12	9	5	6	32	45.7%	11	11	7	0	29	44.6%	23	20	12	6	61	45.2%	10	9	4	0	23	44.2%
発達心理	2	1	0	0	3	4.3%	2	0	0	0	2	3.1%	4	1	0	0	5	3.7%	1	0	0	0	1	1.9%
人間福祉	1	0	0	0	1	1.4%	1	0	0	0	1	1.5%	2	0	0	0	2	1.5%	1	0	0	0	1	1.9%
健康栄養	1	1	0	0	2	2.9%	1	1	1	0	3	4.6%	2	2	1	0	5	3.7%	1	1	0	0	2	3.8%
食物栄養	5	0	5	1	11	15.7%	2	0	2	1	5	7.7%	7	0	7	2	16	11.9%	2	0	2	1	5	9.6%
文芸文化	3	0	0	0	3	4.3%	2	0	0	0	2	3.1%	5	0	0	0	5	3.7%	2	0	0	0	2	3.8%
生活情報	8	3	0	0	11	15.7%	13	3	0	0	16	24.6%	21	6	0	0	27	20.0%	6	3	0	0	9	17.3%
メディコミ	0	1	0	0	1	1.4%	1	1	0	0	2	3.1%	1	2	0	0	3	2.2%	0	1	0	0	1	1.9%
合計(人)	36	17	10	7	70		35	17	11	2	65		71	34	21	9	135		25	15	6	1	47	
割合	51.4%	24.3%	14.3%	10.0%			53.8%	26.2%	16.9%	3.1%			52.6%	25.2%	15.6%	6.7%			48.1%	28.8%	11.5%	1.9%		



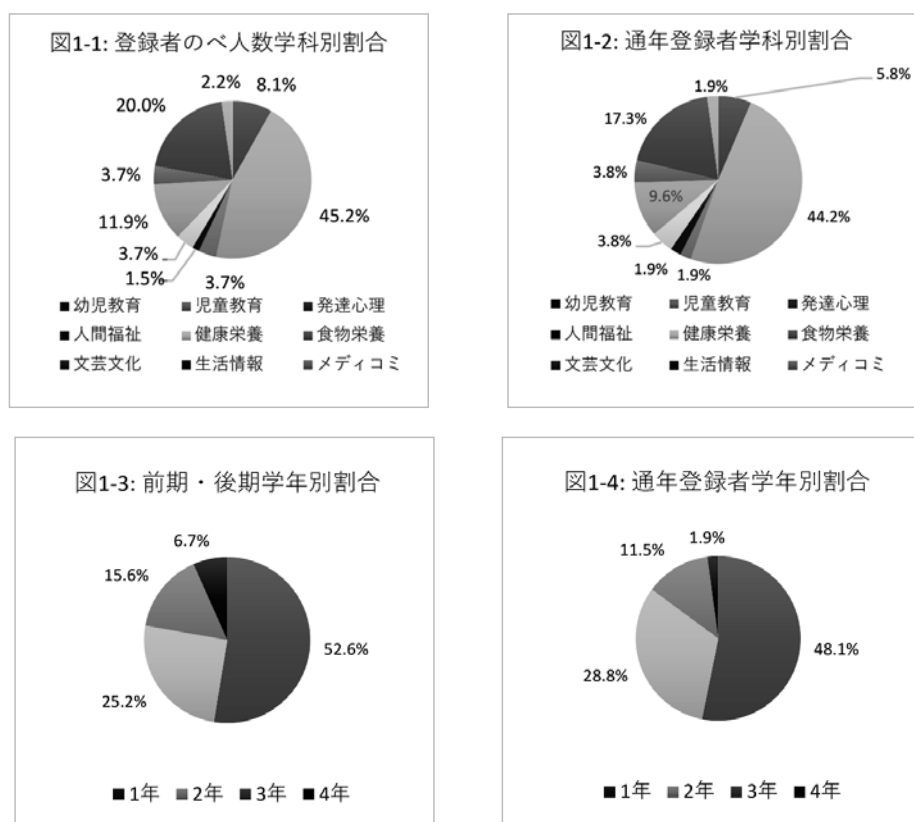


図1: 登録者のべ人数・通年登録者の学科別・学年別割合

表5: ECの利用状況

	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週	第6週	第7週	第8週	第9週	第10週	第11週	合計
前期	10	10	10	8	11	10	10	13	11	13	10	116
後期	10	9	10	11	6	10	10	6	10	8	8	98

ECの時間の利用状況は表5に示した通りである。1週間当たり約10名の利用があり、利用者数は前期のべ116名、後期のべ98名であった。両学期とも登録者全体の3%程度の学生がECを利用したことになる。これ自体は高い数字ではないが、中にはほぼ毎日ECに参加した学生もいたということである。やる気があり、各自の空き時間が合う学生にとっては英語で自由に講師と話せる貴重な時間であるため、全学にECの時間を広く周知し、登録者以外も十分に活用できるようにすべきであった。この反省をふまえ、今後ECが実施できる場合は、メールや学内掲示を利用し、全学への周知を行うようにしたい。

### 3.2. 出席状況

各学期の出席率を66%未満、66～80%、80～90%、90～100%の4つの層に分け、それぞれの割合を示したものが図2である。

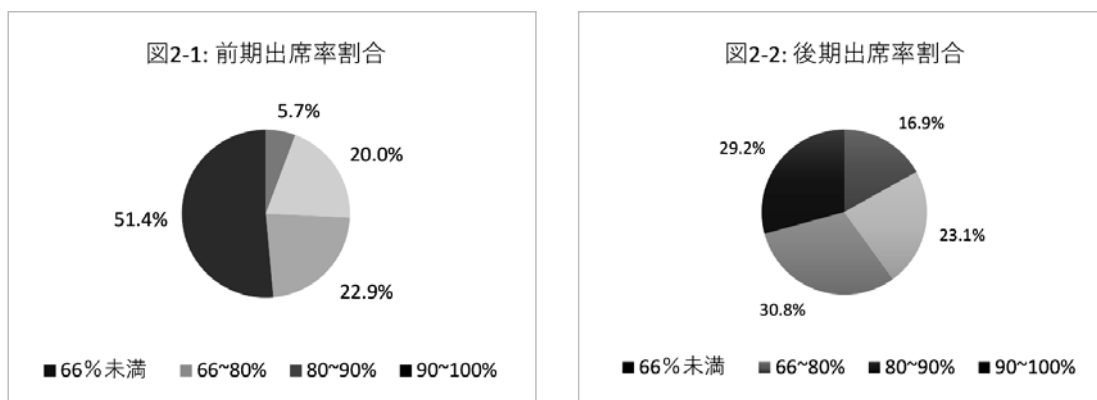


図 2: 出席率

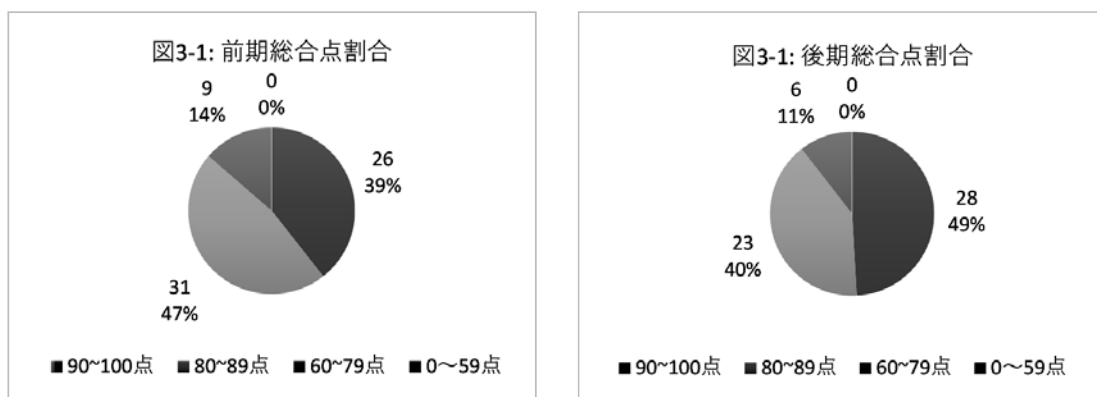


図 3: 総合点別割合

前期の出席率の平均は84%で、出席率90%以上の学生が半数以上であった。登録者のうち5.7%にあたる4名は登録はしたものの出席がほとんどなく、評価の対象外となった。この4名を除いた、66名の評価対象者の出席率の平均は89%であった。

後期の出席率の平均は74%で、前期よりも10ポイント落ちている。出席率が90%以上の学生も30%弱に減った。後期履修者65名のうち、2名は授業開始後に登録を取り消し、6名は出席がほとんどないため、これらを除いた合計57名が評価の対象となった<sup>1)</sup>。評価対象者の出席率の平均は84%であった。

以下の3.3節、3.4節では、前期66名、後期57名の評価対象者について記述する。

### 3.3. 得点・WCALD レベル

各学期の総合点を90~100点、80~89点、60~79点、59点以下に区切り、それぞれの割合を示したものが図3である。

前期は平均点86.9点で、90点以上の割合が約37%、80~90点が約47%である。後期の平均点は88.2点で、90点以上の割合は約49%、80~90点が約40%である。各学期とも59点以下の学生はいなかった。

各学期の総合点の一部となっているWCALDレベルの割合を示したものが図4である。

前期末の学生は1Lレベルから2Lレベルに分布し、1Lレベルが約26%、1Mレベルが最も多く約41%を占めていた。前期の目標である1Hレベル以上に到達した学生は約33%であった。

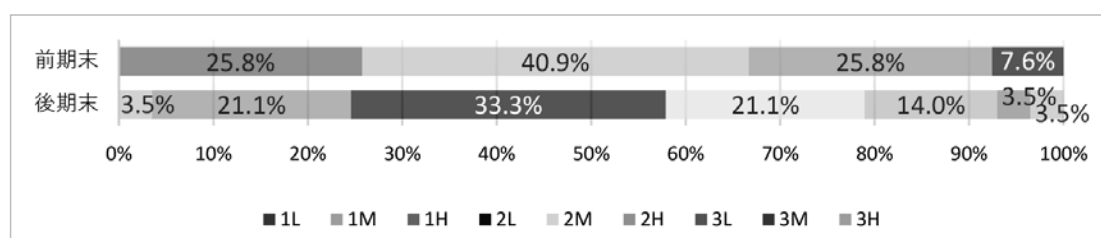


図4: WCALDレベルの割合

後期末では1Lレベルの学生はおらず、1Mレベルから3Hレベルまでの分布となった。前期で41%を占めていた1Mレベルが3.5%に減り、最も多いのが2Lレベルの約33%で、後期の目標である2Lレベル以上に到達した学生は約75%であった。

以上、WCALDの観点からみると、前期は約3分の1、後期は約4分の3の学生が到達目標に達したと判定されていたことになる。

### 3.4. 学生アンケート結果

3.4節では、学期末にWGが独自に実施しているアンケートの結果の一部を報告する。アンケート項目は、授業全般について、講師について、その他、の大きく3つの部分と自由記述からなるが、本稿では授業全般のうち、学生の自己評価・英語能力評価に関する(2)の6つの項目の結果と自由記述を取り上げる。

- (2) a. 受講前に比べ、英語が好きになった。(質問番号1)
- b. 受講前に比べ、リスニング力が伸びたと思う。(質問番号2)
- c. 受講前に比べ、スピーキング力が伸びたと思う。(質問番号3)
- d. 受講前に比べ、総合的に英語理解力が伸びたと思う。(質問番号4)
- e. 全体として、講座に満足している。(質問番号6)
- f. レッソンの復習をした。(質問番号13)

アンケートは各質問に「非常に」「ある程度」「どちらでもない」「あまり……ない」「全く……ない」の5段階で回答する無記名方式で、紙媒体にて授業内で配布・回収した。回収数は前期60（回収率88.7%）、後期49（75.0%）であった。図5はその結果を示したものである。

質問6「全体として、講座に満足している」に対し「非常に」「ある程度」をあわせると、前期約98%、後期約94%の学生が回答していることからわかるように、この講座の満足度は高い。また、質問2～4では80%以上の学生が「非常に」「ある程度」と回答しており、学生の実感としては、リスニング力（質問2）、スピーキング力（質問3）が伸び、総合的な英語理解力（質問4）が伸びたと自己評価をしている結果となった。教科書は使用しているものの、英語コミュニケーション能力の向上を目指した講座であるためか、授業の予習をした学生は半数前後であることが質問13「レッスンの予習をした」の回答からわかる。

両学期の自由記述のコメントのうち、印象に残っている授業・講座のよかった点・改善点についての回答数と複数寄せられたコメントの内容を表6にまとめた。

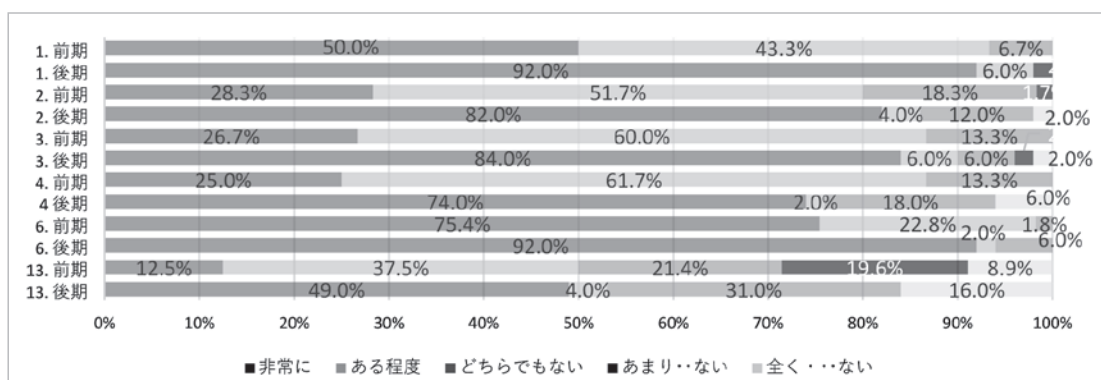


図 5: 学期末授業アンケート結果

表 6: 自由記述のコメント

質問項目	コメント数	コメント内容
印象に残っている授業	前期 52 件 後期 41 件	全部、授業の最初に行う様々なミニゲーム、プレゼンテーション、季節のイベントに関係する授業、道案内
講座のよかった点	前期 43 件 後期 49 件	楽しい雰囲気であった、英語が苦手でも楽しく取り組めた、英語を好きになるきっかけになった、毎日英語に触れて、英語に慣れた、先生がフレンドリーで話しやすい、わかりやすく説明してくれる、優しく接してくれた
講座の改善点	前期 12 件 後期 18 件	振替受講ができるようにしてほしい、毎日は大変、指示が分からないことがある、もう少し難しい、発展的なことをしてみたかった、時間割変更期間を、時間割確定前までではなく、確定後までに設定してほしい

この授業の満足度は高いことを上述したが、その理由の一端が表 6 のコメント内容からうかがえる。講師の明るく優しい人柄に加え、毎回の授業の冒頭で行われた様々なミニゲームでの楽しい雰囲気づくりなど、英語が苦手な学生も毎日楽しく取り組めていた様子が見て取れ、2.2節で述べた第 1 の目標「苦手意識を克服し、外国人と接することに慣れる」はある程度達成されたと言える。

改善点については、授業の内容をもう少し難易度を高くした方がよかったというものがあった。これは、試験的な運用で 1 レベルしか設定できなかったため、すべての学生のレベルに対応することが難しかったことを示している。それ以外は、授業の内容というよりは登録後の時間割変更や欠席時の振替受講ができなかったこと、すなわち、運用方法についてのコメントだった。

上述の指摘については 2020 年度の「コミュニケーション演習」を始めるにあたり改善ができないか検討を行った。欠席時の振替は 1 人の講師が担当する学生総数が多いため、対応することはできなかったが、登録後の時間割変更については、前期の段階で柔軟に対応していただいた。

#### 4. CASEC 得点比較

3.3 節では講師による履修者の WCALD レベル評価の結果を概観し、後期末には約 75% の学生が 2L レベルに到達した、すなわち、表 3（前期）に示したことができるようになったと講師が評価していることを示した。また、3.4 節では授業アンケートの質問 2～6 の回答から、80% 以上の学生がリスニング力、スピーキング力、総合的な英語理解力が伸びたと自己評価していることを示した。

4 節では、上述の担当講師と学生自身の 2 つの評価に加え、英語コミュニケーション能力に関する客

表 7：CASECの問題構成

セクション	内容	問題形式	解答形式	配点
1	語彙	空欄補充	4 択	250 点
2	表現・用法	空欄補充	4 択	250 点
3	大意把握	リスニング	4 択	250 点
4	ディクテーション	リスニング	書き取り	250 点

（CASEC ホームページ(<https://casec.evidus.com/test-summary/> 2020.9.22)をもとに作表)

観的な評価となりうるテストの得点を用い、本科目の効果について検証する。4.1節でまずこれまでのCASECの結果の概要をまとめ、次に4.2節で2019年度のCASECの結果をそれ以前のCASECの結果と比較しながら考察を加える。

#### 4.1. CASEC（2008年度～2019年度）の結果概要

ここで用いたテストは本学で英語の主にプレイスメントテストとして使用していたCASECである。CASECとは「コンピュータを使用した英語コミュニケーション能力判定テスト（Computerized Assessment System for English Communication）」の略で、受験者の解答の正解・不正解に合わせて次に提示される問題の難易度が変更される適応型テストである。問題は4つのセクションから構成され、問題形式、解答形式、配点は表7の通りである。

前半2つのセクションは音声なしで、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4技能の基盤となる語彙と表現に関する知識を測定する。後半2つのセクションは音声ありで、ある程度まとまった量の文章を聞き大意を把握する、キーポイントを書き取るといった、「聞くこと」に関する技能を測定する。つまり、英語コミュニケーション能力の基礎と「聞くこと」に重点が置かれ、「書くこと」の要素が若干加えられたテストであるといえよう。つまり、2.2節で述べた「学内留学—毎日英会話I・II」の第二の目標「身近なトピックに関する基礎的な語彙と表現を、毎回の授業内でのドリルを通して身につけ、反射的に英語を発することができるようになる」の一部を測定できると考えられる。

本学では2008年度から2019年度まで、2016・2017年度の2年間を除く10年間、入学時に実施していた。また、2008～2013年度までの6年間は入学時に加えて1年次学期末にアチーブメントテストとしても実施し、1年間の英語の授業の習熟度の変化を見る貴重な資料となっていた。2008～2015年度までの結果の報告と考察は向後ほか（2009, 2010, 2011, 2012）、設楽ほか（2013, 2015, 2016）で詳しく扱っている。ここではこれまでのCASECの結果と1年間に履修する英語科目の数に焦点を当て、上述の報告を振り返る。

図6は2008年から2019年までの平均点を改めてまとめたものである。

2008～2013年度までは入学時（黒色部分）と1年次年度末（灰色部分）の2回実施していたため、年度内の平均点の変化がわかる。2014年度以降は実施が入学時の1回になったため、入学時の全学平均点のみが図示されている。さらに、2008～2010年度までは必修の英語が週2回の学部（以下、週2回学部）と週1回の学部（以下、週1回学部）があったため、全学の平均点の他に学部ごとの平均点を濃い灰色と薄い灰色のパターン部分で示した（実線両矢印の範囲）。2011～2013年度までは全学で英語の授業が週1回となった（点線両矢印の範囲）ため、年度内の比較のみが図示されている。

2008～2015年度までの上述の報告から明らかになったのは主に以下の3点である。<sup>2)</sup> まず、1点目は、

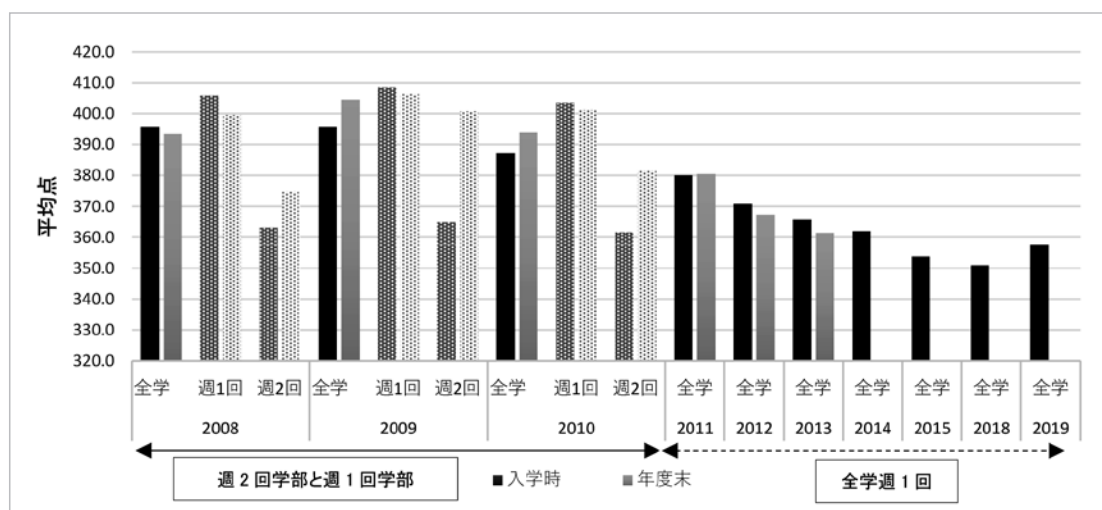


図 6: CASEC 平均点年度内・経年変化

表 8: 「必修のみ」学生と「必修+α」学生の平均点の比較

	必修のみ	必修のみ(400 点台)	必修+α
2012 年 4 月(点)	371.0	443.2	427.3
2013 年 1 月(点)	363.1	417.4	434.4
差(点)	-7.9	-25.8	7.1

(設楽ほか(2013: 185)の一部を掲載)

週 2 回英語の授業がある場合は平均点上がる可能性がある一方、週 1 回では下がるか、もしくはせいぜい維持する程度となる、ということである。図 6 の 2008～2010 年度の平均点を見てみよう。全学の平均点は、年度末が入学時を上回るかどうかは年度により違いはあるものの、いずれにせよその差は小さい。週 2 回学部と週 1 回学部の年度内の比較をすると、週 1 回学部では年度末の平均点が入学時より下がり、週 2 回学部では上がる、という一貫した傾向がみられる。また、2011 年度のカリキュラムの改変により全学で英語（選択必修）の授業が週 1 回となったのだが、これ以降年 2 回実施されていた 2013 年度まで、全学の年度末の平均点が入学時を上回ることにはなかった。

2 点目は、週当たりの授業回数と同じ場合、高得点者ほど入学時より年度末の得点の下げ幅が大きくなる傾向があることである。例えば、表 8 は 2012 年度に週 1 回の英語を履修している全学学生（入学時平均点 371.0 点）と週 1 回の英語を履修している 400 点台の学生（平均点 443.2 点）を比較したもののだが、400 点台の層の方が年度末に大幅に平均点が下がっている。

3 点目は、週 1 回の英語に加えて選択英語科目を履修している学生は、高得点層であっても平均点の低下が食い止められていることである。上記の表 8 では、「必修+α」と記されている列がこれにあたり、入学時の平均点が 400 点台である「必修のみ」の場合と異なり、年度末に平均点の低下を免れていることがわかる。

以上の事実から、大学で英語の習熟度を多少でも上げようと思うならば、最低でも週 2 回の授業が必要であり、特に高得点層でその必要度は上がることが推察される。<sup>3)</sup> もちろん将来希望する進路にもよ



るが、選択科目や課外講座などプラスアルファの英語科目の履修を推奨するなどの方法で、高得点層の力をいかに維持していくかが本学の英語教育の課題の1つである。

#### 4.2. 「学内留学—毎日英会話Ⅰ・Ⅱ」とCASEC得点

2019年度は残念ながら全学でプレイスメントテストとしてCASECを使用する最後の年度となった。また、年度末の全学実施もなかったが、本科目の後期登録者に呼びかけ年度末のCASECも受験してもらった。4.1節で概観したCASECの結果の分析からは、週1回の英語の授業に加えてプラスアルファの英語科目を履修しているのであるから、年度末の平均点が入学時のものを下回することは避けられているのではないかと予測ができる。4.2節では、本科目を履修した学生のCASEC平均点と年2回実施していた2008~2013年度の資料を手掛かりにしながら本科目の効果を考察する。

2回のCASECを受験した学生は、通年登録者が15名、後期のみの登録者が9名であった。通年登録組の15名のうち1名は1回目の受験が2018年4月、残りの14名は2019年4月の受験である。後期のみの登録組は全員2019年4月に1回目の受験をしている。通年登録者と後期のみの登録者の合計24名全員、受講が終わった2019年12月10日～2020年1月10日の間に2回目のCASECを受験している。

上述したようにデータの母数は少ないが、以下ではまず本科目登録者の入学時の得点について取り上げ、次に年度内の得点を比較する。<sup>4)</sup>

表10：平均点比較

	後期のみ登録者					通年登録者				
	Section 1	Section 2	Section 3	Section 4	合計	Section 1	Section 2	Section 3	Section 4	合計
入学時	110.4	95.3	102.2	101.2	409.2	116.5	100.1	112.2	112.0	440.8
後期末	100.0	104.5	110.0	91.5	409.2	114.1	106.3	129.5	113.3	454.1
差	-10.4	9.2	7.8	-9.7	0.0	-2.4	6.2	17.3	1.3	13.3

印部分)に分布している。向後ほか(2009, 2010, 2011, 2012)でも必修(または選択必修)の英語に加えて選択科目や学外講座の英語を履修する学生の入学時平均点は全学平均点より高いことが指摘されており、本科目についても同様の傾向であることがわかる。

次に後期のみ登録者・通年登録者の入学時と年度末の平均点を比較し、当科目の効果について考察する。表10は各セクションの平均点・合計の平均点と入学時と年度末時の得点差を示したものである。

表10からわかるように、後期のみ登録者の場合、セクション1(以下、§1)の語彙と§4のディクテーションで平均点が下がっている。一方で、§2の表現・用法と§3のリスニングによる大意把握では平均点が上がっている。通年登録者の場合は、§1以外で平均点が上がっている。合計点の比較では、後期のみ登録者は入学時と年度末の平均点に違いはなく、通年登録者の場合は年度末が入学時を13.3点上回った。

母数が小さいことに加え、2019年度に全学で年度末のCASECを実施していないので、確かなことは言えないが、年2回実施していた2008~2013年度までの資料を参考にし、以下の3点について指摘する。

まず、上述の予測の通り、後期のみ登録者、通年登録者ともに全学平均より高い得点層ではあるが、後期末の平均点が入学時を下回することは避けられており、通年登録者の平均点は入学時を上回っている。これは、週1回の英語に加えて選択英語科目を履修している学生は、高得点層であっても平均点の低下が食い止められているという4.1節で示した点を支持するものである。

次に、セクションごとに比較してみると、リスニングによる大意把握が通年登録組で特に平均点が上がっている。これは、半期よりも通年で受講する方が、英語でのみ行われる授業を受けている効果が得られるということだと考えられる。

最後に、§1の語彙に関する部分は平均点が下がっており、§4の「書くこと」が一部加味されている書き取り部分も平均点は上がっていない。語彙を増やすことと「書くこと」については当科目の授業だけから習熟度を上げることは難しく、各自が教科書を使用して語彙を取得したり、英文を書いて添削してもらう、といった地道な授業外での学習が求められる、ということが言える。

以上4.2節では、本科目は英語が比較的得意な層が「聞くこと」に関する技能を維持するか、伸ばす一定の効果を持つが、その一方で、語彙数を増やしたり「書くこと」の力を伸ばすためには、学生自身の授業外での地道な勉強が必要となることを指摘した。2020年度から全学必修で実施される「コミュニケーション演習」では、半年であるためこの点を強化することは難しいかもしれない。「コミュニケーション演習」以外の英語科目で強化を図るなどの役割分担が必要であると考えられる。

#### 4. おわりに

本稿では、2019年度「学内留学—毎日英会話Ⅰ(前期)・Ⅱ(後期)」について、この科目の概要を説明した後、実施状況を報告した。さらに、2019年度まで実施していたCASECのデータを用いながら、

本科目が少なくとも高得点層の習熟度の「聞くこと」の力の維持のために役立っていることを報告した。さらに、2020年度から実施される「コミュニケーション演習」とそれ以外の英語科目で役割分担をしつつ、本学学生の英語コミュニケーション能力の向上を目指す必要があることを指摘した。

#### 注

- 1) 後期の評価対象外となった8名のうち7名は通年登録者で前期の出席率は66%～92%であった。
- 2) 今回の検討とは直接関係はないが、CASECを実施していた入学時の全学平均点のみを見ると、2008年に395.3点だったものが年を経るごとに緩やかに低下し続け、2018年には351.0点になっている。2019年度の平均点は357.6点で前年度を若干上回ったものの、12年間で約40点近くも下がっているのである。2019年度でCASECの実施は終了したため、今後の傾向はわからないが、おそらく劇的に平均点が向上していくことはないと考えられる。向後ほか(2011)でも指摘したが、これはおそらく全国的な傾向と思われる(江利川(2006)、小野(2006)、斉田(2003)、茂木(2004)、吉村ほか(2005)など)、江利川(2006)、小野(2006)、茂木(2004)では、その英語学力低下の原因のひとつが中学校でのコミュニケーション中心の学習内容であると指摘されている。本学の入学者の英語学力の低下もこれらの指摘を裏付ける結果となっており、深く憂慮すべき問題である。
- 3) 将来の進路・英語を学ぶ強い動機・英語クラスの集団としてのありようなどの要因も考慮する必要があるが、本稿では割愛する。
- 4) これらの学生が選択英語科目をさらに履修している可能性があり、本来はこの要因についても加味すべきだが、調査を行わなかったため、今回の分析ではこの要因は割愛する。

#### 参考文献

- 江利川春雄(2006)「習熟度別編成の再検討を」,『英語教育』2006, 1月号, 41, 研究社.
- 小野 博(2006)「基礎英語力低下の現状と改善策」,『英語教育』2006, 1-2月号, 研究社.
- 向後朋美・島村豊博・森美榮・設楽優子(2009)「2008年度CASEC結果報告と共通英語教育」,『社会情報学論叢』第13号, 141-165, 十文字学園女子大学.
- 向後朋美・島村豊博・設楽優子(2010)「2009年度CASEC結果報告と共通英語教育」,『社会情報学論叢』第14号, 99-128, 十文字学園女子大学.
- 向後朋美・島村豊博・設楽優子(2011)「2008年度～2010年度CASEC結果の総括と共通英語教育」,『十文字学園女子大学社会情報学部論叢』第15号, 23-55, 十文字学園女子大学.
- 向後朋美・島村豊博・設楽優子(2012)「2011年度外国語選択状況とCASEC結果報告」,『十文字学園女子大学人間生活学部紀要第』10巻, 199-211, 十文字学園女子大学.
- 設楽優子・向後朋美・島村豊博(2013)「2012年度外国語選択状況とCASEC結果報告」,『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』第11巻, 177-189, 十文字学園女子大学.
- 設楽優子・向後朋美・島村豊博(2015)「英語習熟度の経年比較: 2015年の結果の考察」,『十文字学園女子大学研究紀要』第46集, 127～137, 十文字学園女子大学.
- 設楽優子・向後朋美(2016)「英語習熟度の2015年度内比較」,『十文字学園女子大学研究紀要』第47集, 179～190, 十文字学園女子大学.
- 斉田智里(2003)「高校入学時の英語能力値の年次推移」,『STEP BULLETIN』, Vol. 15, 12-22.
- 茂木弘道(2004)『文科省が英語を壊す』, 中公新書.

吉村 幸 (2005) 「大学入試センター試験既出問題を利用した共通受験者計画による英語学力の経年変化の調査」, 『日本テスト学会誌』 Vol.1, No.1, 51-58.

CASEC ホームページ, <http://casec.evidus.com/> (2020.9.26)

文部科学省, 「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説, 外国語編,

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1387016.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm) (2020.9.26)

株式会社ウエストゲイト (2019), 「学内留学—毎日英会話Ⅰ・Ⅱ」 報告書.